SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

レオ＝レオニ研究：「アレクサンダとぜんまいねずみ」の考察を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025369

レオ＝レオニ研究

―「アレクサンダとぜんまいねずみ」の考察を通して―

A Researching Leo Lionni through Japanese Language Teaching Materials “Alexander and the Wind-Up Mouse”

大　塚　　浩
Hiroshi OHTSUKA

（平成 29 年 10 月 2 日受理）

はじめに

レオ＝レオニ（1910～1999）は、1910年5月5日にオランダのアムステルダムで、父ルイス（ダイヤモンド技師で後に公認会計士）と母エリザベト（後にオペラ歌手）の間に生まれている。レオ＝レオニは、1959年に『Little Blue and Little Yellow』で絵本作家としてデビューする。その後1999年に没するまでの間に、『Inch by Inch』、『Swimmy』『Frederick』をはじめ数多くの作品を世に出している。特に、1964年に刊行された『Tico and Golden Wings』は、アメリカ図書協会最優秀作品として指定を受けている。続いて1968年に刊行された『The Biggest House in the World』は、児童図書スプリングフェスティバル賞及びBIB金のリンゴ賞を受賞する等の大きな功績を残している。没後の2004年には、デザイン分野で秀でた業績が認められてAIGA賞が授与されるなど、アメリカ合衆国において最も活躍した芸術家の一人として広く認知されている。

レオ＝レオニ作・絵による教材「アレクサンダとぜんまいねずみ」は、昭和50（1975）年好学社より、レオ＝レオニ作・絵、谷川俊太郎訳の絵本として発表された『アレクサンダとぜんまいねずみ　ともだち　みつけた　ねずみの　はなし』を底本としている。原作は、1969年にPantheon 社より発表されたレオ＝レオニ作・絵による『Alexander and the Wind-Up Mouse』である。

小学校国語教科書教材としての「アレクサンダとぜんまいねずみ」は、昭和55年版の教育出版（小学2年生用・下）をはじめとして、以後長年掲載され続けている。また、大阪書籍においても平成元年度版から平成6年度版まで掲載されている。

レオ＝レオニの作品「アレクサンダとぜんまいねずみ」については、拙稿「小学校国語教科書教材基礎研究」において、作家レオ＝レオニと訳者谷川俊太郎、ねずみのアレクサンダについて、ぜんまいねずみのウイリーについて、二人の出会いについて、それぞれ考察を行ってきている。

そこで本稿では、「レオ＝レオニ研究」の一環として、作品「アレクサンダとぜんまいねずみ」の考究を通し、ウイリーのささやき、アレクサンダの願い事、アレクサンダの「ぼくは……」、アレクサンダの翻意の深層について考察を進めていくものとする。

Ⅰ．ウイリーのささやき

（1）ウイリーは、何故「ひみつめかしてささやいた」のか

アレクサンダとぜんまいねずみのウイリーが、「何時間も楽しい時」を過ごすようになったある日、ウイリーはアレクサンダに「ふしぎな話」をしている。作品本文では、次のように記している。[1)]

ある日、ウイリーはふしぎな話をした。

「なんでも、」

かれは、ひみつめかしてささやいた。

「にわの小石の小道のはじの、きいちごのしげみの近くに、生きものをほかの生きものにかえることのできる、まほうのとかげがすんでるそうだよ。」

「つまり、」

アレクサンダは言った。

「ぼくを、きみみたいなぜんまいねずみにかえられるっていうの？」

秋泉愛子は、このウイリーのアレクサンダに対するささやきについて、次のように述べている。[2)]

「生きものをほかの生きものにかえることのできる、まほうのとかげ」の話を「ひみつめかしてささやいた」ウイリー、アレクサンダを自分と同じにとの思いなのであろうか。（中略）アレクサンダの言動をていねいに読んでいくうち、数少ないウイリーのことばのなかに、「ねじをまいてもらった時しかうごけない」不自由さへの嘆きが感じとれるのではないか。とかげの魔法をウイリーは「生きものをほかの生きものにかえる」と表現したのに対して、アレクサンダは「ぼくを、きみみたいなぜんまいねずみにかえられる」ととらえている。アレクサンダの思いの強さのあらわれではあるが、ウイリーの思いも巧みに込められている場面ではないか。

ここで秋泉は、ウイリーが「ひみつめかしてささやいた」理由を、「アレクサンダを自分と同じにとの思いなのであろうか」として、問題提起を行っている。その一方で「ねじをまいてもらった時しかうごけない」と自らの境遇を話すウイリーの様子から、ウイリー自身の「不自由さへの嘆きが感じとれる」と把捉している。さらに秋泉は、「生きものをほかの生きものにかえることのできる」魔法のとかげについての説明には、「ウイリーの思いも巧みに込められている」と指摘している。

では何故、ウイリーはアレクサンダに対して「ひみつめかしてささやいた」のであろうか。

それは、ウイリーがこれまで「何時間も楽しい時」を過ごしてきた友を、自分と同じ自由に動くことのできない境遇にしてしまおうと思っていたからではなく、魔法のとかげに対するウイリーの願望が含意されていたからではないかと考える。その魔法のとかげへのウイリーの願望とは、ぜんまいねずみから普通のねずみに変えてほしいというものであったのではなかろうか。それは、次の二つの理由に拠る。

第一の理由は、他者の力に依存しなければ自由に動くことさえもできない自分自身を、ウイリーが否定的に捉えていた点である。ウイリーは、アレクサンダからの台所でのパンくず探しの誘いに応じることができずに「でも、いいさ。」と言わざるを得なかった時、自分の意思でそして自分の力で自由に動けないことが、如何に空虚なことであるかを実感してしまったのである。この時から、ウイリーにとって自分の意思でそして自分の力で自由に動くことができな

いことへの引け目は、徐々に大きくなっていったと考えられる。その思いは、アレクサンダと「楽しい時」を過ごせば過ごす程、増幅していったと推測することができる。アレクサンダは、「すきをみては」ウイリーを訪ね、様々な冒険譚をウイリーに話して聞かせている。アレクサンダの聞かせる「ほうき」の話、「空とぶおさら」の話、「ねずみとりとのぼうけん」の話は、ウイリーにとって新鮮且つ興味深い内容であった。その一方でウイリーは、「ペンギンやぬいぐるみのくま、そして、おもにアニーの話」をアレクサンダに話すことしか出来なかったのである。この「おもに」という言語表現に着目したい。アレクサンダの話す世界は、広大であり、一つとして同じ話材がないのに対し、ウイリーの話す世界は、「おもに、アニーの話をした。」とあるように、自由に動き回ることができないウイリーにとって、アニーとの接点しかないがため必然的にアニーに関することに話材が限定されてしまうのである。ウイリーにとってアレクサンダの話す内容の斬新さと豊富さは、自分の力で自分の人生を切り拓いて生きている自由闊達なアレクサンダの姿を髣髴とさせるものであったと考える。

また、アレクサンダが自分を訪ねて来てくれることを受動的に待たない限り、アレクサンダとの「楽しい時」が到来しないという現実が、ウイリーの虚しさを一層強めていたことも事実であろう。アレクサンダが自分を訪ねて来てくれることは、とても嬉しく楽しみなことであったが、ウイリーが能動的にアレクサンダに会いに行くことは物理的に不可能であったのである。アレクサンダとの「楽しい時」は、アレクサンダがアニーの部屋を訪れるという形で幕が開き、アレクサンダがアニーの部屋を去っていくという形で毎回幕を閉じざるを得なかった。つまり二人で過ごす「楽しい時」は、アレクサンダがアニーの部屋にやって来てくれなければ決して成立しなかったのである。友だちと過ごす「楽しい時」を自らの意思と自らの力で創り出すことが出来ないという現実は、他者に「ねじをまいてもらった時しかうごけない」という虚無感を一層ウイリーに募らせたに相違ない。

第二の理由は、ウイリーが四六時中アニーに可愛がられていたわけではない、と考えられる点である。アレクサンダが「かくれ家のくらやみの中でひとりぼっちの時」、アニーの家には人がおり、アレクサンダはウイリーを訪ねることはできない。しかしながら、家の中にアニーがいるからといって、ウイリーがずっとアニーに可愛がられていたとは限らない。ウイリーが初めてアレクサンダと出会った時のように、アニーに放り出されたまま取り残されている時間も存在したであろう。時にはアニーが他の遊びや他のおもちゃに夢中になっている時間もあったと思われる。このような時ウイリーは、アニーに放置された自分自身を惨めに思ったり、アニーの関心を引いている他のおもちゃを羨ましく思ったに相違ない。アニーにかまってもらえない時の惨めで寂しい思いを、ウイリーは自分の力ではどうすることもできないのである。こうした時ウイリーは、アレクサンダならきっと自分の力で別の場所に楽しいことを探しに行くだろうと想像したことであろう。アレクサンダが話してくれた冒険譚のように、自分の力でどこへでも自由に行けたのならどんなに楽しいことであろうか。そうすれば、アニーが自分に関心を向けてくれる時間をじっと受け身で待つしかしかないという、寂寥感を味あわなくても済むのにと思ったかもしれない。

夜には「白い枕をして、人形とぬいぐるみのくまの間で」眠りに就くウイリーは、「お気に入りのおもちゃ」の中でも、特別なおもちゃである。しかしながら、ウイリーは沢山あるアニーのおもちゃの一つに過ぎないこともまた事実である。アニーに可愛がられることによってはじめて、ウイリーは自分自身に価値を見いだすことができる。ウイリーはアニーに放り出された

り、ちやほや可愛がってもらえなかった時、自分の存在を酷く小さく感じたであろう。そして、独力で強く生きていくことのできるアレクサンダを羨ましく思ったに相違ない。ウイリーは、アレクサンダのように自分自身の力で生きることが出来たのならと強く願っていたのではなかろうか。つまり、アレクサンダがウイリーを羨んだように、ウイリーもまた、アレクサンダを羨んでいたのである。

これら二つの理由から、ウイリーが「ひみつめかしてささやいた」のは、「アレクサンダを自分と同じ」ぜんまいねずみに変身させ、彼を自らの運命の道連れにしようとしたのではなく、自分がアレクサンダのような普通のねずみに変わりたいと願っていることを、アレクサンダに気付いて欲しかったからではないかと考える。

（2）アレクサンダに託す思い

ウイリーは、「生きものをほかの生きものにかえることのできる、まほうのとかげがすんでるそうだよ。」とアレクサンダにささやいている。このウイリーの言葉は、二通りの解釈が可能である。すなわち、一つは、アレクサンダが聞き直したように、「アレクサンダをウイリーみたいなぜんまいねずみにかえる」ことができるという解釈であり、もう一つは、「ウイリーをアレクサンダのような普通のねずみにかえる」ことができるという解釈がそれである。ウイリーは、アレクサンダと過ごす時間の中で、彼が自分に憧れていることを認識していたと思われる。その上でウイリーは、敢えて二通りの解釈のできる言語表現を行ったのである。それは、アレクサンダにぜんまいねずみの不自由さと虚しさを感じ取って欲しいという思いがあったからではなかろうか。

「ひみつめかしてささやいた」ウイリーは、アレクサンダにのみ聞こえる小さな声で、魔法のとかげの話をしたはずである。もし仮にウイリーが、アレクサンダを自分と同じぜんまいねずみにするために魔法のとかげの話をしたのであれば、「ひみつめかしてささやく」必要はなく、アレクサンダに対し堂々と直接的表現で伝達すればよいはずである。

しかしウイリーは、実際に「ひみつめかしてささやいた」のである。他者に「ねじをまいてもらった時しかうごけない」自分自身の空虚さを痛感した際、「でも、いいさ。」と強がりを言ってしまうウイリーの心の深層を考慮する必要があろう。見栄っ張りで強がりのウイリーは、「自分自身をアレクサンダのような普通のねずみに変えて欲しい。」という自らの願いを、アレクサンダに察知して欲しかったのではなかろうか。ウイリーは、「むらさきの小石」を探し出したくても探すことができない、そして魔法のとかげの元へ行きたくても行くことのできない自分に成り代わって、アレクサンダに「むらさきの小石」を探し出した上で、魔法のとかげの所に赴いてもらい自分の願いを叶えて欲しかったのではないかと考える。ウイリーのささやきは、自分自身の願いをアレクサンダに託すメッセージであったと考えることもできよう。

Ⅱ．アレクサンダの願い事

（1）アレクサンダの願い

ウイリーから不思議な話を聞いたアレクサンダは、その日の午後、直ちに魔法のとかげの元を訪ね、確認作業を行っている。作品本文では、次のように記している。[3)]

その日の午後、アレクサンダは、さっそくにわへゆき、小道のはじまで走っていった。

「とかげよ、とかげ、」

かれはささやいた。すると、とつぜん目の前に、花々とちょうちょうの色をした、大きなと

かげがあらわれた。

「ぼくを、ぜんまいねずみにかえられるって、ほんと？」

アレクサンダは、ふるえ声できいた。

「月がまん丸の時、」

とかげは言った。

「むらさきの小石をもっておいで。」

来る日も来る日も、アレクサンダは、にわでむらさきの小石をさがしつづけた。

だめだった。黄色い小石、青い小石、みどりの小石、――だが、むらさきの小石は、一つもなかった。

つかれはて、おなかはぺこぺこで、とうとう、かれはうちへもどった。

アレクサンダを驚かせたのは、「生きものをほかの生きものにかえることのできる、まほうのとかげがすんでる」というウイリーの「ふしぎな話」であった。話を聞いたアレクサンダは、ウイリーに対し「つまり」と前置きした上で、「ぼくを、きみみたいなぜんまいねずみにかえられるっていうの？」という質問を行っている。この「つまり」という接続詞に込められた「アアレクサンダの心情」に留意したい。この「つまり」は、ウイリーの話した「生きものをほかの生きものにかえることのできる、まほうのとかげがすんでる」という前文の趣旨を踏まえ、アレクサンダ自身の具体的な願いへと敷衍させるに先立って用いられている。さらに、この「つまり」と「ぼくを、きみにみたいなぜんまいねずみにかえられるっていうの？」との間に存在する「時間的空間」についても考察していく必要があろう。

ウイリーの不思議な話を聞いたアレクサンダは、本当に自分が変身できるのかどうかの真偽を自分自身の耳で確かめずにはいられない。アレクサンダはその日の午後、「さっそく」庭に行き、小道の端まで走って行き「まほうのとかげ」を訪ねている。アレクサンダは、出現した魔法のとかげに対し「ぼくを、ぜんまいねずみにかえられるって、ほんと？」と問うている。このアレクサンダの二つの質問について考えてみたい。すなわちアレクサンダの二つの質問とは、前者が「ぼくを、きみみたいなぜんまいねずみにかえられるっていうの？」というウイリーに対する質問であり、後者が「ぼくを、ぜんまいねずみにかえられるって、ほんと？」という魔法のとかげに対する質問がそれである。アレクサンダは、ウイリーと魔法のとかげの両者に対し、反復するように各々に質問し噂の真偽を確かめている。この質問の反復は、アレクサンダがぜんまいねずみへの変身を如何に強く望んでいたかを証左するものと言えよう。また、アレクサンダが、魔法のとかげに対し「ふるえ声」で聞いていることに注目したい。この時の「ふるえ声」は、ウイリーが話した「ふしぎな話」が本当であってほしいと祈るようなアレクサンダの心情の表出であったと考える。こうして見ると、「ウイリーみたいなぜんまいねずみになること」が、アレクサンダの悲願であったと考えられよう。

（2）必死に探すアレクサンダ

魔法のとかげから「月がまん丸の時」に「むらさきの小石」を持参するようにと告げられたアレクサンダは、懸命に「むらさきの小石」の探索に乗り出している。

西郷竹彦は、「むらさきの小石」に対するアレクサンダの思いについて、次のように述べている。[4)]

＜来る日も来る日も＞とくれば、文芸の授業のつみあげのある学級では、『大きなかぶ』の＜あまい　あまい＞＜おおきな　おおきな＞と同じかさねことばだという反応がきっとお

こります。そして、このかさねことばで表現されているアレクサンダの行動から、それほどウイリーみたいなぜんまいねずみになりたいんだというアレクサンダの願いの強さがわかります。むらさきの小石をさがしつづけるアレクサンダのようすからきもちを読みとるのです。

＜黄色い小石、青い小石、みどりの小石、――＞とならべたてて語るのも、そのうらに必死で探すアレクサンダの姿――願いの強さを強調するものです。（中　略）＜つかれはて、おなかはぺこぺこ＞になるまで、むらさきの小石をさがしつづけたアレクサンダのようすからその願いの強さがわかります。

ここで西郷は、「来る日も来る日も」むらさきの小石を探し続けた様子から、アレクサンダの「願いの強さ」が読み取れると指摘している。さらに、「つかれはて、おはかはぺこぺこ」になるまでむらさきの小石を探し続けたアレクサンダの行動からも、アレクサンダの「きもちを読みとる」ことができると把捉している。

アレクサンダは、「来る日も来る日も」庭で「むらさきの小石」を必死で探し続けた。この「にわ」は、アニーの家の庭であろう。ねずみであるアレクサンダの目からすれば、かなり広大に映る庭の中から「むらさきの小石」を探し出す行為は、多くの時間と膨大な労力を要することになる。庭に敷かれている石は、恐らく何層にも敷き詰められていたであろうし、その中には当然のことながら大きな石も存在したはずである。ねずみのアレクサンダにとって、表層の小石を一つ一つを持ち上げて第二層以降の石を確認する作業に、如何ほどの時間と労力を費やしたことであろうか。それでもアレクサンダは、只管「むらさきの小石」を探し続けた。

アレクサンダは、「むらさきの小石」が見つからなかったからといって、一度きりの探索で諦めることは決してなかったと推測できる。庭を一通り探して見当たらなかったとしても、もしかすると見落としがあったのではないかと思い、もう一度最初から探し直したのではなかろうか。それほど「むらさきの小石」は、アレクサンダにとって重要な石だったはずである。探し直すことも一度や二度ではなく、三度目、四度目というようにアレクサンダは、「来る日も来る日も」繰り返し探し続けたと考えられよう。見つからなかったと落胆しながらも、今度こそ「むらさきの小石」を見つけてみせるのだと自分自身に言い聞かせながら、繰り返しそして丹念に探し続けたのである。だからこそアレクサンダは、広大な庭における多くの石の中から「黄色い小石、青い小石、みどりの小石、――」を見つけることができたのである。アレクサンダは、数ある庭の石の中から色のついている小石を見つけるたびに、「もしかしたら……」という思いで目を輝かせ、手に取って石の色をじっくりと確かめ、それが「むらさきの小石」ではないと分かると落胆し、思い直して再び探し始めるという行為を何度も何度も繰り返したのである。その回数は、「むらさきの小石は、一つもなかった。」と断言できるほどの回数であったのではなかろうか。この「一つもなかった」という言語表現に着目したい。むらさきの小石は、「見つからなかった」でも「見つけることができなかった」でもなく、「一つもなかった」のである。つまり、「一つもなかった」と明言できるほど、アレクサンダは庭中を隈無く探し尽くしたのである。この「一つもなかった」とアレクサンダが断言する言語表現に、むらさきの小石に対する一方ならぬ「アレクサンダの思い」を看取することができよう。

（3）かわいそうなウイリー

来る日も来る日も、庭で必死に探し続けたアレクサンダであったが、残念なことにむらさきの小石は、どこを探しても「一つもなかった」のである。疲れ果て空腹を抱えながら家に戻ったアレクサンダは、物置の隅に打ち捨てられた古いおもちゃで一杯の箱の中のウイリーと遭遇

する。作品本文では、この場面について、次のように記されている。[5)]

つかれはて、おなかはぺこぺこで、とうとう、かれはうちへもどった。ものおきのすみに、かれは、古いおもちゃでいっぱいのはこを見つけた。そしてそこに、つみ木とこわれた人形にはさまれて、ウイリーがいた。

「どうしたの？」

びっくりして、アレクサンダは言った。

ウイリーは、かなしい話をした。

アニーのたんじょう日に、パーティーがあって、みんながプレゼントをもってきた。

「明くる日、」

ウイリーは、ためいきまじりに言った。

「古いおもちゃが、たくさんこのはこにすてられたんだ。ぼくらは、みんなごみばこゆきさ。」

アレクサンダは、なかんばかり。

「かわいそうに、かわいそうなウイリー！」

かれは思った。

ウイリーの「かなしい話」を聞いたアレクサンダの「かわいそうに、かわいそうなウイリー！」という内言について、藤原鈴子は、次のように述べている。[6)]

はじめ、アレクサンダは、ウイリーの生活と対比することで、ウイリーにあこがれていたが、捨てられたウイリーを見て、＜かわいそうに！＞と同情する。そして、＜ウイリーみたいな＞から＜ぼくみたいな＞ねずみとしてウイリーを生かす道を選んだ。

ここで藤原は、当初「ウイリーの生活と対比することで、ウイリーにあこがれていた」アレクサンダが、「捨てられたウイリーを見て、＜かわいそうに！＞と同情」したことにより、「＜ウイリーみたいな＞から＜ぼくみたいな＞ねずみとしてウイリーを生かす道を選んだ」と捉えている。

果たしてアレクサンダは、「＜かわいそうに！＞と同情」したことだけでウイリーを救おうと思ったのであろうか。むらさきの小石を見つけたアレクサンダの行動と内言との間には、大なる懸隔が存在していると考える。

また、山田多須子は、「かわいそうに、かわいそうなウイリー！」について、次のように述べている。[7)]

つかれはてて、家へもどった時にアレクサンダの目に入ったのは、ウイリーの悲しい姿であった。古いおもちゃとして捨てられようとしているウイリーを、なかんばかりに「かわいそうに、かわいそうなウイリー。」と心配する。ここの叙述の中で、「ためいきまじり」「なかんばかり」の二つは、ウイリーとアレクサンダの立場が逆転した文であるので、十分考え話し合いをさせたい。

ここで山田は、「『ためいきまじり』『なかんばかり』の二つは、ウイリーとアレクサンダの立場が逆転した文である」と把捉している。物置の隅に置かれた箱に入れられたウイリーから「かなしい話」を聞くことによって、ウイリーとアレクサンダの「立場が逆転」したというよりも、両者の「立場が同位」のものとなったと考えることも可能なのではなかろうか。ウイリーは、物置の隅の古いおもちゃで一杯の箱に入れられたことにより、はじめて人間にとって「不必要な存在」となったのである。

渥美孝子は、同じ場面について、次のように述べている。[8)]

ウイリーの境遇の変化によってアレクサンダが知ったのは、ウイリーもまた人間の気紛れに支配される存在であった、ということである。ウイリーは、人間にとってはいつでも新たな商品と代替可能な「モノ」にすぎず、「かわいが」られ「ちやほや」されるのは、せいぜいが新しいおもちゃにとって代わられるまでの間のことでしかない。アレクサンダにとって、それは予想だにしなかった「かなしい話」であった。アレクサンダは「なかんばかり」になって「かわいそうに、かわいそうなウイリー！」と同情する。言い換えると、ウイリーの話を「かなしい」と感じることができるのは、疎外の悲しみを痛切に味わったアレクサンダだからこそなのである。

ここで渥美は、「ウイリーの話を『かなしい』と感じることができるのは、疎外の悲しみを痛切に味わったアレクサンダだからこそなのである。」と主張している。人間から疎まれ孤独な生活を余儀なくされているアレクサンダは、物置の隅に置かれた古いおもちゃで一杯の箱に入れられてしまったウイリーと自分自身の姿を重ね合わせ、ウイリーの境遇に対し可哀想と心底から感じたのである。

一方ウイリーは、従前のおもちゃである自分自身には脇目も振らずにプレゼントされた新しいおもちゃに夢中になって愛情を注いでいるアニーの姿を横目に見やりながら、強い疎外感を味わったのではなかろうか。

しかしながら、渥美の主張する「疎外の悲しみ」を熟知しているはずのアレクサンダが、何故即座にウイリーを救出する決断をしなかったのか、という疑問は依然として残存したままである。

Ⅲ．アレクサンダの「ぼくは……」

（1）走り出すアレクサンダ

アレクサンダが来る日も来る日も庭中を必死になって探したにも拘わらず発見することができなかった「むらさきの小石」が、物置の隅に置かれたウイリーの入った箱の近くで突然見つかった。作品本文では、この場面について、次のように記している。[9)]

するとその時、何かが、とつぜん目に入った。ゆめじゃないかな……？　いや、本当だ！むらさきの小石だ。

むねをどきどきさせて、大事な小石をしっかりうでにだき、かれは、にわへと走り出た。まん月だった。いきをきらして、アレクサンダは、きいちごのしげみのそばで立ち止まった。

「しげみの中のとかげよ、とかげ。」

大いそぎで、かれはよんだ。

はっぱががさがさ鳴って、とかげがあらわれた。

「月はみちた。小石は見つかった。」

とかげは言った。

「おまえは、だれに、それとも、何になりたいの？」

「ぼくは……」

アレクサンダは、言いかけてやめた。そして、とつぜん言った。

「とかげよ、とかげ。ウイリーを、ぼくみたいなねずみにかえてくれる？」

とかげは、まばたきした。目もくらむような光。そして、すべてがしいんとしずまりかえった。

むらさきの小石はきえていた。

山田多須子は、「むらさきの小石」を抱きながら魔法のとかげの元へ走るアレクサンダについて、次のように述べている。[10)]

その時とつぜんむらさきの石が見つかるところなど、話の転回がみごとである。

むねをどきどきさせて、小石をしっかりうでにだき、いきをきらしてとかげの所へ走るアレクサンダの気持ちは、ぜんまいねずみになれるよろこびでいっぱいであることをおさえて詠まないと、次の変革につながらない。

ここで山田は、「むらさきの小石」をしっかりと腕に抱き魔法のとかげの元に走るアレクサンダの気持ちを、「ぜんまいねずみになれるよろこびでいっぱいである」と捉えている。さらに渡辺真弓は、この場面について、次のように述べている。[11)]

あれほどさがしても見つからなかった紫の小石を目の前にした時のアレクサンダの胸の高鳴りが伝わってくる。庭へ走り出た。息を切らしてしげみのそばで立ち止まったアレクサンダは、大いそぎでとかげを呼んだ。早くウイリーのようになりたいという思いで。

渡辺は、この場面から「あれほどさがしても見つからなかった紫の小石を目の前にした時のアレクサンダの胸の高鳴りが伝わってくる。」と把捉している。そしてアレクサンダは、「早くウイリーのようになりたいという思いで」魔法のとかげを呼んだと考えている。

アレクサンダは、ウイリーの身に起きた悲劇を聞いてもなお、「むらさきの小石」を見つけた時には、まだウイリーみたいなぜんまいねずみになりたいという願いを抱いていたのである。「むらさきの小石」を見つけた時、アレクサンダは、「ゆめじゃないかな……？」と一度その存在を疑っている。これは、今まで自分自身の願いを叶えるために必死になって探し求めてきた「むらさきの小石」を発見することができたという事実を、瞬時には受け止めることができずにいるアレクサンダの心情を示す言語表現であろう。そしてアレクサンダは、「本当だ！」と再確認した上で、「むらさきの小石」の存在を現実として受け入れている。この場面では、幻のように思えた「むらさきの小石」が確かに存在した、探し求めてきた「むらさきの小石」をやっとの思いで見つけることができた、というアレクサンダの喜びが表現されていると考える。

つまり、この場面におけるアレクサンダは、自分自身の願いを叶えるために必要不可欠な「むらさきの小石」の発見に歓喜しているのである。決して、ウイリーを救うための「むらさきの小石」の発見に歓喜している訳ではないと考える。

（2）アレクサンダの「ぼくは……」

大きなとかげから「おまえは、だれに、それとも，何になりたいの？」と願いを問われたアレクサンダは、「ぼくは……」と、自らの願いを言いかけて止めている。「言いかけてやめた」という言語表現は、魔法のとかげに対し告げるつもりの内容がアレクサンダの胸の内に存在していたことを示すものである。ウイリーの窮状を知り「かわいそうに、かわいそうなウイリー！」と心を痛めているアレクサンダが、ウイリーを自分のようなねずみにして欲しいと願うのであれば、この場面で願いを中断する必要はない。アレクサンダは、ウイリーの変身とは異なる別の願いを、魔法のとかげに告げようとしていたのである。アレクサンダが言いかけた続きの言葉は、「ウイリーみたいなぜんまいねずみになりたい」という自分自身の予てからの願いであろう。

ここで、この「ぼくは……」というアレクサンダの発言について、レオ＝レオニ作・絵による原作テクスト『Alexander and the Wind-Up Mouse』を見てみたい。原作テクストでは、

むらさきの小石を発見したアレクサンダが魔法のとかげの元へ走り出す場面について、次のように記されている。[12)]

All excited, he ran to the garden, the precious pebble tight in his arms. There was a full moon. Out of breath, Alexander stopped near the blackberry bush. “Lizard, lizard, in the bush,” he called quickly. The leaves rustled and there stood the lizard. “The moon is round, the pebble found,” said the lizard. “Who or what do you wish to be?”

“I want to be . . .” Alexander stopped.
Then suddenly he said, “Lizard, lizard, could you change Willy into a mouse like me?” The lizard blinked. There was a blinding light. And then all was quiet. The purple pebble was gone.

アレクサンダの発言である「ぼくは……」の部分は、原作では「I want to be . . .」と記されている。アレクサンダの発言である「ぼくは……」は、原作である英語原文では「I . . .」でもなく、「I want . . .」でもなく、「I want to be . . .」であることに注目したい。確かに、「I . . .」、「I want . . .」、「I want to be . . .」のそれぞれを、大意として「ぼくは……」と日本語訳することは可能であろう。こうした相違は、原作である英語原文と日本語訳との文法構造の違いによって生じるものである。しかしながら、ここではアレクサンダの「ぼくは……」について、深く考えてみたい。「I want to be . . .」を日本語訳すれば、「ぼくは……になりたい」である。日本語訳の「ぼくは……」と原作を考慮した日本語訳の「ぼくは……になりたい」との相違は、読者である読み手にどのような影響を及ぼすのであろうか。

日本語訳の「ぼくは……」と原作を考慮した日本語訳の「ぼくは……になりたい」とでは、この場面のアレクサンダの思いを考える上で差異が生ずると考える。すなわちその差異とは、前者の「ぼくは……」は、アレクサンダが「ぼくは……」と言いかけて途中で中断したと解されるのに対し、後者の「ぼくは……なりたい」は、アレクサンダ自身がウイリーのようなぜんまいねずみになりたいことを、魔法のとかげに告げようとしていたことが明確に示されており、この瞬間にアレクサンダ自らがその願いを打ち消したと解することができる。

つまり、原作の「I want to be . . .」を考慮することより、この時点のアレクサンダの言葉「ぼくは……」には、ぜんまいねずみになりたいという自らの強い願望を保持していたにもかかわらず、「言いかけてやめた重大な理由」が存在したと考えられる。

（3）何故アレクサンダは、「言いかけてやめた」のか

ここでは、何故アレクサンダは、魔法のとかげに対し、「ぼくは……」と言いかけてやめたのかについて考察を進めていきたい。

上田忠治は、この時のアレクサンダの心持ちについて、次のように述べている。[13)]

ウイリーの不幸が自分の問題として結びついたのは、アレクサンダがその小石を持ってとかげに会ったときである。この時に、自分がウイリーの立場になることの無意味さに気づく。つまり、アレクサンダはウイリーの起こった出来事から、みんなにちやほやかわいがられるウイリーの生活の弱点―すべてを周りにゆだねているために、何らかの力で勝手に状況を変えられても、自分ではどうすることもできない―を知った。

上田は、「ウイリーの不幸が自分の問題として結びついたのは、アレクサンダがその小石を

持ってとかげに会ったとき」であるとし、その折に初めて「自分がウイリーの立場になることの無意味さ」に気付いたと捉えている。

果たしてアレクサンダは、「みんなにちやほやかわいがられるウイリーの生活の弱点」を知り得たから、自分自身の願いを翻意させたのであろうか。アレクサンダは「ぼくは……」と発言するまで、「ウイリーの生活の弱点」を全く認識していなかったとは言い難いと考える。この点は、疑問が残る。

大槻和夫は、箱の中のウイリーを見つけた時のアレクサンダの思いについて、次のように述べている。[14)]

> ごみばこに捨てられそうになっているウイリーを見つけて、アレクサンダが「かわいそう」と思ったという場面が直前に描かれてはいても、だからといってアレクサンダがねずみになりたいという願いを捨てたかどうかはわからない。それどころか、突然目の前に夢のような奇跡が起こったのだから、ウイリーのような存在を「かわいそう」と思ったことも念頭から消えているに違いないと思うほうが自然かもしれない。

ここで大槻は、アレクサンダが「ごみばこに捨てられそうになっているウイリーを見つけ」、ウイリーを「かわいそう」と思った直後に、むらさきの小石を発見するという「奇跡が起こったのだから」、ウイリーを「『かわいそう』と思ったことも念頭から消えているに違いないと思うほうが自然かもしれない」と把捉している。

物置の隅の古いおもちゃで一杯の箱の中に入れられたウイリーから悲しい話を聞いたアレクサンダは、「なかんばかり」となり、「かわいそうに、かわいそうなウイリー！」と心を痛めている。この絶体絶命のウイリーの窮地を目にし、かつその窮状を直接ウイリーから聞いた時のアレクサンダの心持ちとその後のアレクサンダの行動の矛盾について、更に深く考察していく必要があると考える。

Ⅳ．アレクサンダの翻意の深層

ここでは、アレクサンダの願いが、「ぼくは……」から「ウイリーを、ぼくみたいなねずみにかえてくれる？」へと翻意した深層について考えていきたい。

（1）アレクサンダにとって「ウイリーの存在」とは

まず、アレクサンダにとって「ウイリー」は、どのような存在であったのかについて考えたい。アレクサンダとウイリーは、初対面から互いのことを知ろうと心掛けている。アレクサンダは、「ほうきや、空とぶおさらや、ねずみとりとのぼうけん」についてウイリーに話して聞かせている。一方ウイリーも「ペンギンやぬいぐるみのくま、そして、おもにアニー」のことをアレクサンダに話している。表面的には、「二ひきの友だち」は、相互に「何時間も楽しい時」を過ごしているかのように見える。

しかしながら、アレクサンダとウイリーの会話は、互いに各自の自慢話を他者に伝えることに終始しており、両者は互いに虚勢の張り合いをしていると看取することもできる。残念ながら、アレクサンダとウイリーは、腹を割って心底から自分自身の置かれている「真の境遇」について語り合ってはいないのである。事実アレクサンダは、日常生活において自分自身が如何に人間から忌み嫌われ、如何に危険と隣り合わせの日々を送っているか、そして如何に孤独と対峙しながら日々暮らしているか、という自分自身の悲哀をウイリーに話せずにいる。もう一方のウイリーもまた、常にアニーのご機嫌に左右されていることやアニーにねじを巻いて貰っ

た時しか動くことができないという、自分自身の不自由さをアレクサンダに話せずにいる。

アレクサンダにとってウイリーは、日常生活の自分自身の悩みや苦しみを本音で語り合える相手ではなく、むしろ自分自身の抱える孤独感を一時的に埋めてくれるだけの単なる話し相手に過ぎないとも言える。アレクサンダにとって翻意する前までのウイリーの存在は、「形式的な友だち」であったと考えることもできよう。

（2）ウイリーの「かなしい話」を聞いたアレクサンダの行動の矛盾

物置の隅に置かれた箱の中のウイリーを見つけたアレクサンダは、ウイリーから「古いおもちゃが、たくさんこのはこにすてられたんだ。ぼくらは、みんなごみばこゆきさ。」という話を聞き、「なかんばかり」となる。そして、落胆するウイリーを見て「かわいそうに、かわいそうなウイリー！」とアレクサンダは同情を寄せている。

しかしながら、むらさきの小石を見つけ出したアレクサンダは、魔法のとかげに対し「ぼくは……」と予てから自らが抱いていた願いを告げようとしている。ここでは、ウイリーの身の上に起きた悲しい出来事に心を痛めているはずのアレクサンダが、何故「ぼくは……」と自らの願いを告げようとしたのかについて考えたい。

アレクサンダが、ウイリーの身に起きた悲劇に対し、心の底から同情しウイリーを救いたいという思いを持していたのであれば、「むらさきの小石」が目に入った瞬間から、若しくは魔法のとかげの元へ走って行く道中においても、アレクサンダの頭の中はウイリーを救いたいという思いで一杯であったはずではなかろうか。しかし、これまでの考察で明らかになったように、アレクサンダは、むらさきの小石を発見し魔法のとかげの元へ走っている場面はもとより、「ぼくは……」と言いかけて止める時まで、自分自身がぜんまいねずみになって「みんなにちやほやされてかわいがられたい」という願望を保持していたことは明白であろう。

この場面では、魔法のとかげの元に走り出すアレクサンダの思いを表現した、「むねをどきどきさせて」「しっかりうでにだき」「いきをきらして」という言語表現にも着目したい。「むらさきの小石」を発見し自分自身の夢の実現を想像して「むねをどきどきさせて」いるアレクサンダ、発見した「むらさきの小石」を落とさぬように「しっかりうでにだき」庭へ走り出すアレクサンダ、自分自身の願いを一刻も早く実現させるために「いきをきらして」木苺の茂みに棲む魔法のとかげの元に急ぐアレクサンダの姿を、それぞれ見て取ることができる。

アレクサンダは、ウイリーの悲劇を聞いて、「かわいそうに、かわいそうなウイリー！」と同情はしているが、「ぼくらは、みんなごみばこゆきさ。」と絶望の淵に立っているウイリーに対し、何の解決策も講じようとはしていない。アレクサンダは、窮地に追い遣られているウイリーの視点に立脚しておらず、ウイリーの重大な危機に真摯に対応していないのである。このウイリーの悲しい出来事の直後に、むらさきの小石は発見されたのであるが、アレクサンダは「ぼくが……」と言いかけて止めるまで、危機に瀕しているウイリーよりも自分自身の願望を叶えることを優先している。この時のアレクサンダは、「みんなにちやほやされてかわいがられたい」という自分自身の欲求を優先してしまう「自己中心的な存在」であったと考えることもできよう。

（3）「形式的な友だち」から「実質的な友だち」へ

アレクサンダは、魔法のとかげに対し「ぼくは……」と言いかけて止めている。そして、突然「とかげよ、とかげ。ウイリーを、ぼくみたいなねずみにかえてくれる？」と発言する。ここに、アレクサンダの「心の変容」が存在すると考える。

すなわち、アレクサンダの心の変容とは、ウイリーの窮地を「他人事」から「自分事」へと変化させたことである。それは、ウイリーの「かなしい話」を聞いて同情はするもののどこか他人事であったアレクサンダが、「ぼくは……」と言いかけて止めた時、ウイリーの目線で物事を考え、ウイリーの窮地を自分事として認識することができるアレクサンダへと変容した瞬間であったと言える。ここに、これまで自分自身の願望を成就させることに力点を置いていた「自己本位の思考」から、窮地に立つウイリーを慮ることのできる「他者本位の思考」へと成長したアレクサンダの姿を見て取ることができる。

アレクサンダの翻意は、自分がウイリーのようなぜんまいねずみに変身したとしても、いつかは捨てられてしまう可能性があることに気付いたからという打算的な判断からでは決してない。アレクサンダの翻意は、自分自身にとって「最も大切なことは何か」に気が付いたことに起因している。アレクサンダにとって「最も大切なこと」とは、自分自身が皆にちやほや可愛がられることではなく、「ウイリーと共に同じ時間を過ごすこと」であった。自分自身にとって「最も大切な存在であるウイリー」を救いたいというアレクサンダの強い意思が、「とかげよ、とかげ。ウイリーを、ぼくみたいなねずみにかえてくれる？」という発言に込められているのである。アレクサンダの「ぼくが……」について国語教室で取り扱う際は、この点を学習者と共に考える場面が欲しい。

アレクサンダが「ぼくが……」と言いかけて止め、「とかげよ、とかげ。ウイリーを、ぼくみたいなねずみにかえてくれる？」と発言した場面は、アレクサンダとウイリーの関係性が「形式的な友だち」から「実質的な友達」である「親友」へと変容した瞬間であると考えるのである。それは、アレクサンダがウイリーを、自分自身の抱える孤独感を一時的に埋めてくれる話し相手としてではなく、日常生活における自分自身の悩みや苦しみを本音で語り合える相手として希求した瞬間でもある。

アレクサンダとウイリーにとってこれから待ち受けている生活は、安心安全の平穏な日々では決してない。むしろ、アレクサンダとウイリーの前には、辛く険しい茨の道が待ち構えていると言えよう。アレクサンダとウイリーの将来には、前途洋々たる明るい未来が開けているとは限らないのである。自由な生活を獲得することは、同時に生命をも脅かす幾多の危機や矛盾を受け入れることになる。それは当然のことながら、「みんなにちやほやされかわいがられる」ことは皆無に等しい、厳しく且つ困難な生活を選択することになるのである。

しかしアレクサンダは、その茨の道をウイリーと共に歩むことを決断したのである。アレクサンダは、「みんなにちやほやされかわいがられたい」という自らの欲求の実現よりも、窮地に陥っているウイリーを最大の危機から救うことに力点を置いたのである。それは、アレクサンダが自分自身にとって「最も大切な存在」としてウイリーを明確に認識した瞬間であり、アレクサンダにとって「掛け替えの無い親友」を心底から希求した瞬間であったと考えるのである。

【引用文献】

１）『小学国語　2下』教育出版、平成14（2002）年6月20日、80頁
２）秋泉愛子稿「アレクサンダとぜんまいねずみ　レオ＝レオニ作　谷川俊太郎訳」『味わう力を育てる文学作品の授業2年』、日本文学教育連盟編、あゆみ出版、平成9（1997）年8月10日、51頁
３）前掲１）の文献、80～82頁
４）西郷竹彦監修『文芸研・教材研究ハンドブック４　レオ＝レオニ　谷川俊太郎訳　アレクサンダとぜんまいねずみ』、明治図書出版、昭和62（1987）年3月1日、23～24頁
５）前掲１）の文献、82～83頁
６）藤原鈴子稿「アレクサンダとぜんまいねずみ」西郷竹彦編『文芸教育』、明治図書出版、平成2（1990）年9月、40～41頁
７）山田多須子「アレクサンダとぜんまいねずみ　レオ＝レオニ作・谷川俊太郎訳・好学社刊」『季刊　文学教育』20巻、鳩の森書房、昭和56（1981）年、94頁
８）渥美孝子稿「羨望と共感·「友だち」という関係性―『アレクサンダとぜんまいねずみ』―」田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力　小学校編2年』、教育出版、平成25（2013）年3月15日、94頁
９）前掲１）の文献、83～85頁
10）前掲７）の文献、94頁
11）渡辺真由美稿「アレクサンダとぜんまいねずみ　レオ＝レオニ　教育出版二年下」児童言語研究会編「楽しく力のつく授業の創造　国語の授業　特集レオ＝レオニの世界」144号、一光社、平成10（1998）年2月、19～20頁
12）Leo Lionni 著『Alexander and the Wind-Up Mouse』、Pantheon、昭和44（1969）年
13）上田忠治稿「教材分析『アレクサンダとぜんまいねずみ』」、「国語の授業」62号、一光社、昭和59（1984）年6月1日、98頁
14）大槻和夫稿「＜授業の検討＞文学の授業における共体験の成立と意味づけ」「学校教育」887号、広島大学附属小学校・学校教育研究会、平成3（1991）年6月1日、40頁

A Researching Leo Lionni through Japanese Language Teaching Materials “Alexander and the Wind-Up Mouse ”

Hiroshi OHTSUKA

（Received October 2 , 2017）

Abstract

Leo Lionni（1910-1999）was born in Amsterdam, Republic of United Netherlands . The first recorded example of his work *Alexander and the Wind-Up Mouse* ran in 1969 edition of Pantheon Books.

Later, in 1969, he had his first work, *Alexander and the Wind-Up Mouse* officially published. A fuller, revised version *Alexander and the Wind-Up Mouse* was included.

The main issues examined in the research of Leo Lionni, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of *Alexander and the Wind-Up Mouse* and those in the school textbook version.

The textbook version of *Alexander and the Wind-Up Mouse* was published by Kyouiku Publication in 1980 . It was selected for the first time as a teaching material for students aged 8 years or older. Since 1980, the textbook has been reprinted a number of times.